

ニューヨークテロ事件の現地から

松賀 正考（明石市）

- 現地でのメール記録をもとに -

今春長男が母校の歯学部に入學し、ストレス多く時間に追われるこの開業医生活を将来引き継いでやろうという殊勝な人間の出現に、私は早々と「優雅なセミ＝リタイア計画」を描き始めました。もともと文系学部卒業後、歯学部に入學した変わり種であった私の人生計画では、（不謹慎を承知であえて言えば）この「苦しきことのみ多き」開業医生活も、別のある夢へのステップボードと考えていたふしもあり、さあ「いよいよだ！」と勢い込んでみたものの、さて何から手を着けていいものやら、何はともあれ、出身の英米語学科の本場へ行ってみるべえ、と夏休み明けの季節、のんびりとした（はずの）ニューヨークツアーに出かけました。9月11日、世界中を恐怖と不安の渦の中に叩き込んだあのニューヨークテロ事件の朝、お上りさんツアー中の私は、まさにあの世界貿易センタービルに向かう地下鉄の電車に乗っており、突然の停車と十分に聞き取れない駅のアナウンスに訳の分からないまま、地上に出、目の前で繰り広げられる白昼夢のような光景を前に呆然と立ち尽くしておりました。



そんな訳で「いよいよ我が人生のメインステージの開幕だ！」と勢い込んで出かけた初の米本土ツアーはスリルと波乱に満ちた『命からがらツアー』と化しました。しかし、あたかも台風の目の中に入ったような地元の広大な公園や大学キャンパス、美術館などのゆったりした雰囲気は、騒然たる状況と隣り合わせだけにより印象深く、複雑な現代社会を象徴する巨大国家アメリカの懐の深さをあらためて実感させるものであったと思います。

帰国後、その経験について原稿を書けとのお話をいただきましたが、へたに文章を作り直すより、当時の国内とのメールのやり取りを讀んでいただく方が状況を伝えやすいのではとは考えました。以下は、その茫然自失ツアーのメール記録です。

最後に、今回の悲惨な事件によって失われた多数の犠牲者とそのご家族に心からの哀悼の意を捧げ、拙文を終えたいと思います。

（なお、今回の経験の詳細資料を以下のホームページに集めております。御参考まで。

<http://www.kh.rim.or.jp/mmatsuga/NY>)



2001年9月17日 月曜日 6:57:13 AM

差出人：m松賀/明石

タイトル：WTC テロ事件の現場報告

宛先：j 情報調査室2000

m 明石情報委員会

z 雑談ルーム

緊張のニューヨークから何とか帰国いたしました。一昨日の午後からニューヨークの空港がようやく再開し始め、昨日の朝のデトロイト経由便で定刻の1時間遅れの午後5時前に関空に着きました。ニューヨークの空港は物々しい警備で、至る所立ち入り禁止、公衆電話すら機能停止されていましたが、デトロイトまで来ると普段と変わらず、呑気に公衆電話にPCをつないで何十分も仕事をしているビジネスマンの姿もありました。

このメールを現地から送ろうと思いましたが、あんまりにも生々しくて、余計な心配をかけるといけないので、帰国してから出すことにしました。

実は、あのテロ事件があった11日の朝、私は午前中空いていた時間を利用してマンハッタン南部の観光地にでも行こうと考え、ホテルでの朝食を済ませた後、タイムズ=スクウェア近くの駅から地下鉄に乗り、まさにあの事件の現場となったワールド=トレード=センター方面に向かう路線の電車に乗っておりました。半分くらい南下した頃、地下鉄の電車の電灯が急に点滅し、突然の停車を3、4度くり返しました。アメリカの地下鉄は頼りないなあ・とぼんやりしていると、聞こえにくい車内案内放送の中にExplosionという言葉が何度か出て来たように思いました。地下鉄関係の施設内で爆発事故でもあったのだろうか、ちょっとやばいなあ、と思いはじめるとついにある駅で停車したまま長時間の停車状態に入りました。どうやら事故

の発生のため先には行けないという状況のようでした。アナウンスの言葉の中には少し先の駅名が出ており、その電車はしばらくして発車しましたので、もう少し先までは運行したようですが、乗り換えや引き返すことを考えて、その駅で地下鉄をおりました。

地上に出て、辺りを見回していると、空に煙りが広がっており、その先をたどって行くとか何やら大きな建物の上部近くから火が出て猛烈な勢いで煙りが上がっています。あんなでかい建物で火災かあ、それにしてもでかい建物だなあ、と思いながらよく見ると、同じ形の建物が2つ並んでおり、その1棟から猛烈な火と煙りが出ている。どこかで見た建物だなあ、と考えるうちにようやくそれが、ガイドブックにも出ている有名なワールド=トレード=センターであることに気がつきました。辺りはまさに騒然としており、パトカーのサイレンがけたたましく鳴り響き、救急車が激しく行き来し、近くの店やオフィスから飛び出した人たちが路上に溢れ、すぐそばの巨大なビル火災を見ながら興奮気味に言葉を交わしていました。私もその群集の中で、啞然として火災現場を眺め思わずカメラのレンズを向けていたのですが、その時突然群集の中から悲鳴のような叫びが起きました。一瞬何の騒ぎなのか分からず、辺りをみまわし、再び建物に目をやると、さっきまで燃え盛っていた建物の上部がなんと崩壊し消えていたのです。

まるで白昼夢をみているようでした。ハイジャックされた民間機が衝突した、ということは、その日の夜まで分かりませんでしたので、その爆発が航空機の衝突で起きたということは分かりませんでした。ただ、そういえば、その直前、建物のごく近くを航空機が1機飛んでいてその航跡が不自然な感じがしたのをぼんやり覚えているような気がします。しばらくすると、群集の中から再び大きな悲鳴が何度か繰り返し上がりました。建物の方に目を向けると、残っている建物の盛んに火を上げている付近か

ら小さな黒い物体が落下しています。火災による破片が飛んでいるように見えていたのですが、それが逃げ場を失った人が飛び下りているのだ、ということに気がついた時、さすがに背筋が寒くなりました。あの高さから飛び下りて、助かるはずがないのは明らかでした。路上の群集の中には泣き崩れている女性や涙を流しながら祈りの言葉を捧げている人の姿が見えました。行き交うパトカー・救急車・消防車の数はますます増え続け、路上の群集も膨らみ、さらには火災の煙りが近付いてくる気配がしてきて、ようやく、これはヤバイ！と気がつきました。とにかくホテルのある市内中心部に戻る必要があると考えましたが、再び地下鉄を利用する気は起きず、タクシーを探しましたが、通り過ぎるタクシーは当然のことながら人を乗せており、空車は見当たりません。意を決して、北に向かって歩き出しました。北に向かう路上は同じ思いの人たちの群れが流れて溢れんばかりでした。途中、コーヒーで一息つきたいと思い喫茶店に入ろうとしましたが、1軒目は早くも臨時休業に入っており、次に入った店は閑散とした雰囲気の中を（おそらくラテン系住民の居住地域だったのでしょう）スペイン語の放送が大音響で流れていました。歩き続けるうちに、徐々に街の雰囲気も落ち着きはじめ、歩き始めて2時間もたったでしょうか、中心部のタイムズスクウェア付近まで来て、まるで何ごともないかのような日常的光景が広がっているのを見て、ようやく深い安心感が心に広がっていくのを感じました。

ホテルの部屋に帰って一息ついて、あらためて考えてみると、大事件のあったワールドトレードセンターは、その日の観光予定の一つであり、その日の朝、やや寝坊気味で起き、ちょっと迷いながらも、結局ホテルのカフェでゆっくりした朝食を取って出かけなければ、最悪あの事件に巻き込まれていたかもしれないこと、建物の中にはいなくても、南端まで着

いてしまっていれば、帰り道が閉ざされ、大混乱の中に取り残されていたかもしれないことに気がつきました。日本からのメールで指摘された通り、あの阪神大震災とこの衝撃的なテロ事件の両方を直接体験する、という珍しい経験の持ち主になってしまいましたが、そのどちらでも直接的な大きな被害を負わなかった悪運の強さには感謝するしかありません。遙か日本からいろいろ御心配いただいたことに感謝申し上げます。以上珍しい体験の現地報告と御礼まで。（メールここまで）

< ニューヨーク インターネット事情 >

実は今回、同じヒルトン系列のホテルを2つ泊まったのですが、最初のホテルでは、部屋のTVにキーボードが付いており、このTVがインターネットにつながっていて、普通の放送以外にインターネットのホームページが見られるようになっていました。但し、このTV画面上では日本語表示ができず、日本語のページを見ると暗号のような表示になってしまいました。

しかし、同時に普通のパソコンを持ち込んでつなぐと高速の常時接続ができるコネクターも別にあり、私の場合、ノート型のパソコンを持参しており、このパソコン上では通常日本語表示ができました。この持ち込みのパソコンでの接続料が最初のホテルでは1日700円位の料金でしたが、後のタイムズ=スクウェアのホテルでは、何と無料でした。

これらの状況にすごいなあ、と感心していたのですが、というのは、私はホテルの部屋の通常の電話線を通して、現地のインターネット接続業者の番号にコンピュータから電話をかけ、現地の市内通話料金でインターネットを利用しようと考え、そのための契約（国際ローミングサービス契約）をして出かけたわけですが、例の事件前までは、この形の利用は不要だったわけで、しかも高速で24時間つながっているサービスをホテル側が用意していたわけで

すから。

ところが、あの事件のあった11日の夜10時くらいから、この接続が不可能になってしまいました。フロントに聞いてみると、理由は告げられず、現在シャット=ダウンしているとの返事だけでした。あの状況の中では、遥かな日本との連絡メール、航空機の運行状況等々についての情報収集のための不可欠な手段として、インターネットは言わばライフラインの一つでしたから、あわてて接続方法を切り替えて旅行前から準備してきた国際ローミングサービスによる現地の接続業者への通信先につなごうとしましたが、これもまた不通状態でした。

推測ですが、おそらくこの時点で、ニューヨーク市内のインターネット接続に関して何らかの規制がかかったのではないかと思います(**)。つまり、あの時点では、まださらなるテロ活動が起こされる可能性があり、その連絡にインターネットが利用されると懸念されたのでしょうか。さて困ったぞ、と考えて、結局普段自分が日本で利用している日本の接続業者の接続先に国際電話経由でつなぐことを思いつきました。これはちょっと理由が分からないのですが、当初この接続すらうまくいきませんでした。一夜明けた翌12日の朝7時くらいにようやくこの形の接続が成功しました。それにしても、アメリカ現地の航空会社のホームページ等を見るために、わざわざ日本の接続点まで国際電話経由でつないで、アメリカ現地の情報収集をしたわけですから、考えてみれば随分変てこりんな形を取らざるをえなかったわけです。

12日の深夜というか、13日の早朝になってようやく、アメリカ現地の接続点での利用が可能になりました。この時点で初めて、旅行前に準備してきた国際ローミングサービスが可能になりました。国際電話経由の時は、何しろ、分刻みで100円硬貨が落ちていく感じがして、接続時間がきわめて高価で貴重な感覚がありました。が、地元につなぐと確か1通話25セントでした

から(但し、ホテルの館内通話サービス料が追加されましたが)やっと落ちついてインターネット利用ができる状況になりました。砂漠地帯で水の一滴が金一粒だったのが、ようやく水道のある所に来た、というような感覚、と言えば大げさでしょうか。

結局、帰国のためホテルを出た時点まで、ホテルの高速常時接続は使えませんでした。ニューヨークの空港でも公衆電話が使えない状況でしたから、テロ対策として、非居住者の情報通信手段を閉鎖したのでしょうか。マンハッタン島(ご存じのようにマンハッタンは一つの島です)へ出入りする道路が厳重な管理下に置かれ、殊に外部からの流入がほとんどストップされていた状況と同質の規制が情報流通の世界でも行われたわけで、いろいろ考えさせられるものがありました。

それにしても、インターネットがいかに我々の日常生活に深く入り込んでいるかをあらためて実感した経験でもありました。

阪神大震災の時、緊急事態時のフレキシブルな情報伝達手段として、インターネットの有用性が日本で初めて脚光を浴びたように感じましたが、今回はその有用性が両刃の剣として重視され、一部規制さえされた、というのは、それだけインターネットが我々の生活の中で抜き差しならぬ位置づけを持ち、道路と同じく社会的インフラになりきっているという証拠と言えるでしょうね。

<注:(*)この種のサービスは日本のホテルでも例えば地元のポートピアホテル等でも始めているようです。(**)当時のニューヨークのインターネット状況についての詳しい筋からの情報では、あの事件の後、政府関係の厳しいメールチェック(一種の盗聴)が行われたようで、そのため、トラフィック(メールの流通)が極端に低下し、事実上、インターネットが利用できない状況に陥った、というのが真相だそうです。>